主日礼拝説教「良いぶどう酒でおもてなし」予稿

日本基督教団石神井教会　2024年1月21日

【旧約聖書日課】出エジプト記　33章12～23節

12モーセは主に言った。「あなたはわたしに、『この民を率いて上れ』と言われました。しかし、わたしと共に遣わされる者をお示しになりません。あなたは、また、『わたしはあなたを名指しで選んだ。わたしはあなたに好意を示す』と言われました。13お願いです。もしあなたがわたしに御好意を示してくださるのでしたら、どうか今、あなたの道をお示しください。そうすれば、わたしはどのようにして、あなたがわたしに御好意を示してくださるか知りうるでしょう。どうか、この国民があなたの民であることも目にお留めください。」14主が、「わたしが自ら同行し、あなたに安息を与えよう」と言われると、15モーセは主に言った。「もし、あなた御自身が行ってくださらないのなら、わたしたちをここから上らせないでください。16一体何によって、わたしとあなたの民に御好意を示してくださることが分かるでしょうか。あなたがわたしたちと共に行ってくださることによってではありませんか。そうすれば、わたしとあなたの民は、地上のすべての民と異なる特別なものとなるでしょう。」17主はモーセに言われた。「わたしは、あなたのこの願いもかなえよう。わたしはあなたに好意を示し、あなたを名指しで選んだからである。」

18モーセが、「どうか、あなたの栄光をお示しください」と言うと、19主は言われた。「わたしはあなたの前にすべてのわたしの善い賜物を通らせ、あなたの前に主という名を宣言する。わたしは恵もうとする者を恵み、憐れもうとする者を憐れむ。」20また言われた。「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」21更に、主は言われた。「見よ、一つの場所がわたしの傍らにある。あなたはその岩のそばに立ちなさい。22わが栄光が通り過ぎるとき、わたしはあなたをその岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、わたしの手であなたを覆う。23わたしが手を離すとき、あなたはわたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない。」

【使徒書日課】ヨハネの手紙一　1章1～4節

1初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。――2この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。――3わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。4わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　2章1～11節

1三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。2イエ
スも、その弟子たちも婚礼に招かれた。3ぶどう酒が足りなくなったので、母が
イエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。4イエスは母に言われた。
「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていませ
ん。」5しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとお
りにしてください」と言った。6そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめ
が六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。7イエ
スが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、か
めの縁まで水を満たした。8イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のと
ころへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。9世話役
はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水を
くんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、
10言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣った
ものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」
11イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。
それで、弟子たちはイエスを信じた。

カナの《良いぶどう酒》【こども説教のために】

弟子たちが主イエスに従うようになった初めのころ、カナという町で婚礼が開かれ、主イエスや弟子たちも招かれました。祝いの宴会のために、ご馳走や飲み物がたくさん用意されていたはずですが、来客が予想よりも多かったのでしょうか、途中でぶどう酒がなくなってしまったようです。婚礼に来ていた主イエスのお母さまがそのことを告げると、主イエスは、召使たちに水がめに水をいっぱい入れて、そこから汲んだものを宴会の席に運ぶように言いました。運ばれてきたものを世話役が味見してみると、それはとても良いぶどう酒でした。世話役は、どうしてこんなに良いぶどう酒を今まで出さずに取って置いたのかと、不思議に思ったというのです。

「これが主イエスの最初のしるしでした」と、ある弟子たちは言うようになりました。主イエスが神の御子としてお働きになられていることが示された最初の出来事だったと言うことです。でも、弟子たちは、水がぶどう酒に変えられることを見て、そう言ったのではないと思います。婚礼の祝いで喜びを分かち合うためのぶどう酒がなくなってしまったときに、良いぶどう酒、最初のものよりもっと良いものを見せてくださったからです。

主イエスと共に歩むとき、わたしたちは、困った事態の中でも、最悪の状況の中でも、神が与えてくださっている良いものを見るようになるのです。

どこから来たのか？

先週、わたしは、年に何度が招かれて行く外部の集会で、聖書の学びを担当してきました。教会ではありませんが、キリスト教を土台とした団体の支部で、信者の方は三分の一程度かもしれません。信者ではない方の多い場所で聖書の話しをすることは、わたしにとっても学びの機会ですから、できるだけ引き受けてきました。今回出向いたのは、実は、わたしの母もメンバーになっている集会です。母に頼まれたわけではありませんが、母を通して私が牧師であることを知ったメンバーの方が、お声かけくださったのです。母のいる集会なので、学びの後の軽食懇談の際には、どうしてもわたしども親子の話題を話し始める方がいます。黙っているのもおかしいので、話題に合わせてお答えもしますが、せっかくの機会を個人的な話題で無駄にしてしまっているようで、わたしは何となく居心地が悪いのです。そういうこともあって、集会中はできるだけ、母と会話をしないことにしています。

カナの婚礼の出来事の中で、お母さまから「**ぶどう酒がなくなりました**」と言われた主イエスは、どこか冷たく感じられるような答え方をなさいました、「**婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだきていません**」と。もっとも、これは、婚宴のただ中でのことです。主イエスは、ときに周囲から「**大食漢で大酒飲み**」（ルカ 7:34 など）と揶揄されるほどの人でしたから、このときも、すでに酒に酔っていたに違いありません。「ぶどう酒がもうありません」と言われて、酔っ払いよろしく、「奥さん、おかまいなく。まだ時間じゃないでしょう？」と冗談めかしてお答えになっただけかもしれません。とは言え、お母さまは大真面目にぶどう酒の心配をしていたのです。贔屓目に、自分の息子ならば何か対処してくれるのではないかと期待もしていたのでしょう。召使たちに、「**この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください**」と申し添えているのです。

この後、主イエスが召使たちに水がめに水をいっぱいにして、そこから汲んで運んでくるようにおっしゃられたのは、確かに、お母さまの一言があったからなのでしょう。けれども、主イエスはそのことを、宴会の世話役には分からないようにして、なさいました。隠れてなさったのです。良いぶどう酒がどこから来たのか、それを知っているのは、運んだ召使たち、そして、その一部始終を見ていたであろうお母さまだけ、でした。良いぶどう酒は、主イエスが手配なさったものであるとは知られないまま、宴席の人々にふるまわれたのです。

良いものを見ても、わたしたちは、それがどこから来たのか、誰によってもたらされたのか、知らずにいることが多いのです。それを知る者が告げない限り、知られないまま、その真実が埋もれてしまうこともあるのです。

顔は見えなくとも…

主イエスがなさった不思議なお働きを、弟子たちの教会は、御子としての「しるし」だったと伝えました。「ヨハネ福音書」は、「しるし」の出来事を七つ伝えているそうです。弟子たちが、それを「しるし」として伝えなければ、それらの出来事は主イエスを伝える物語には加えられず、歴史の闇に埋もれてしまっていたかもしれません。

実のところ、主イエスご自身は、それらの出来事を積極的に人前で誇示してみせられたわけではなかったのかもしれません。どこか、人知れず行われているように見えるのです。「カナのぶどう酒」の出来事でも、同じカナに滞在されていたときに王の役人の息子を癒された出来事（4:46 以下）でも、ベトザタの池で病人を癒された出来事（5:1 以下）でも、また、五千人にパンと魚を分けられた出来事（6:5 以下）でも、主イエスは、直接ご自分の手を出されたわけではないのです。ご自分の手で何かをなさったのは、生まれつきの盲人の目を見えるようにされるために、ご自分の唾で土をこねてその人の目にお塗りになった出来事（9:1 以下）ぐらいでしょうか。

それでも、それらの出来事が起こったとき、そこに主イエスがいらして、お働きくださっていたことを見た者たちがいたのでしょう。いいえ、主イエスは、そのようにして、ご自分の関わられた出来事の中で「良いもの」がもたらされていることを、弟子たちにお示しくださっていたのでしょう。

それは、神のお働きによってもたらされる「良いもの」を見るようになるための訓練であったように、わたしには思えます。

シナイ山で「十戒」をはじめとする教え（律法＝トーラー）を主なる神から授けられたモーセには、悩みがありました。エジプトから導き出した人々が、自分たちの従うべき神を見定められずにいたのです。モーセがシナイ山に入っている間に、人々は、金の雄牛像を造って、自分たちを導く神を見ようとしたりしていました。モーセには、神から授かった「掟の板」がありましたが、人々には、よくわからなかったのでしょう。神に命じられて建てた「臨在の幕屋」も、人々にとっては隠された場所でした。モーセは、人々が神の顔を知るようになれば、間違いなく従うことができるようになると考えたかもしれません。けれども、主は、「**あなたはわたしの顔を見ることはできない**」と仰せなのです。人はただ、「**わたしの後ろを見るが、わたしの顔は見えない**」と。それでも、神は、人のためにすべて善い賜物をお見せくださる。モーセは、主がそうおっしゃられると、教えました。

弟子たちから始まった教会に連なるわたしたちは、主イエスの後姿を追う者たちです。主イエスの御顔をはっきりと見ることがなくとも、そこに、神の賜る「良いもの」を見ることができる。それは、幸いなことなのです。